

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 12 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21530155

研究課題名（和文） ジョージ・ケナン、ポール・ニッツェとアメリカ外交の展開

研究課題名（英文） George F. Kennan, Paul H. Nitze and the Evolution of American Foreign Policy

研究代表者

佐々木 卓也 (SASAKI TAKUYA)

立教大学・法学部・教授

研究者番号：60202090

研究成果の概要（和文）：

ジョージ・ケナンとポール・ニッツェは封じ込め政策に重要な影響を与えた戦略家である。封じ込めを提唱したケナンは日欧の経済再建を重視し、相互譲歩による対ソ交渉を唱えた。彼はさらに欧州的な外交に共感し、1970年代のデタント外交を支持した。これとは対照的にニッツェは軍事的な封じ込めを主張し、対ソ交渉には消極的であった。結局ニッツェの路線が対ソ政策の基本を形成した。ただし興味深いことに、レーガン大統領はニッツェ的な路線とケナンの路線を適切に実践し、冷戦の終結に至る過程で決定的な成果をあげたのである。

研究成果の概要（英文）：

George Kennan and Paul Nitze were two major architects of containment policy. Kennan, emphasizing the non-military aspect of Soviet threat, formulated the economic reconstruction of Western Europe and Japan. In contrast, Nitze, constantly advocating for the militarization of containment, was highly critical of the détente advanced by Kissinger whose view of international politics was shared by Kennan. It turned out that Nitze's strategic concept basically shaped the containment policy in the Cold War period. Interestingly, however, the Reagan administration appropriately implemented the line proposed both by Nitze and Kennan, thus playing an essential part in bringing an end to the Cold War.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：冷戦、封じ込め、アメリカ外交、ジョージ・ケナン、ポール・ニッツェ

1. 研究開始当初の背景

アメリカの封じ込め政策を最もよく体現した戦略家であるジョージ・ケナンとポール・ニッツェについては、多くの研究がなされてきた。ケナンはソ連の膨張に対する「封

じ込め」の提唱者として、ニッツェは「冷戦のバイブル」（永井陽之助）ともいうべき NSC68 の主要起草者としてよく知られている。ケナンは初期の経済優先の封じ込めで中心的役割を担い、マーシャル援助、日本の経

済再建計画を進めたものの、冷戦の激化に対応する封じ込めの軍事化に幻滅し、政府を離れた。ケナンは冷戦期を通じて、軍事的封じ込めの最も厳しい批判者の一人であった。これに対してニッツェは軍事的封じ込めを主導し、政府の内外にあって常にソ連の軍事的脅威を喧伝し、アメリカの軍事力の強化を主張した。

ケナンとニッツェの個人文書が最近まで非公開であったこともあり（ケナン文書はその一部のみ、厳しい制限のもとで公開されていた）、両者の外交論、外交構想の全体像、さらには両者の考えを比較・検討する本格的な研究はなかった。本研究の申請を行った直後に、ようやく二人の伝記である *Nicholas Thompson, The Hawk and the Dove: Paul Nitze, George Kennan, and the History of the Cold War* (2009)が出版された。著者はニッツェの孫であるだけに、個人的エピソードをふんだんに織り込んでいるものの、二人の構想に対する掘り下げた分析、検討には乏しく、その意味では極めて不十分な著作であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、封じ込め政策を最もよく体現した二人の戦略家—ジョージ・ケナンとポール・ニッツェ—の外交思想、外交論を比較・検討し、彼らの知的軌跡を戦後アメリカ外交の史的展開に関連づけて考察することである。

3. 研究の方法

伝統的な外交史研究であり、第一次史料、二次資料を利用しながら、テーマに接近する。まずアメリカ合衆国の外交史料 (FRUS)、National Security Archive (ジョージ・ワシントン大学) が公開する関係文書の閲覧、立教大学図書館が保有するトルーマン、アイゼンハワー、ケネディ、ジョンソン、ニクソン、G・H・W・ブッシュ大統領図書館の資料 (マイクロフィルム) の分析、冷戦史の研究図書の閲読を行った。

冷戦に関する史資料の公開は続々と続いており、それらをもとに多くの論文、著作が出版されているが、特筆すべきは2010年にケンブリッジ大学出版が、70名を超える専門家の協力を得て、冷戦史 (全三巻) 刊行したことであろう。これらは本研究を進める上で、大いに有用であった。

本研究代表者は研究期間中に、二度アメリカに赴き、ワシントン DC の議会図書館でニッツェ文書、プリンストン大学図書館でケナン文書を中心に史料を閲覧した。ニッツェとケナンの個人文書はつい数年前に、ほぼ全面的に公開された。また滞米中には、ケナンの伝記を執筆中であった John Lewis Gaddis 教

授 (イェール大学) を訪ね、本研究について意見を交換した。冷戦史研究の第一人者である Gaddis 教授のケナン論は大変参考になった。またおそらく論文などに反映させることは難しいであろうが、ケナンの emotional な性格を示す幾つかのエピソードは興味深かった。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果とその位置づけ

①本研究の主な成果は、2011年11月に刊行した『冷戦—アメリカの民主主義的生活様式を守る戦い』(有斐閣)に活かすことができた。本書は冷戦の開始、展開、終結をアメリカ外交史の文脈に置いて探求する試みであり、さらに国内で行われた外交論争、内政と外交の相互作用も考察した。おそらく日本の学界では単独の著者による最初の冷戦の通史ではないかと思われる。

本書では当然のことながら、ケナンとニッツェの外交構想が主要課題の一つであり、限られた紙幅ながら、相応の議論を展開することができた。まずケナンが第二次世界大戦中より対ソ警戒論を展開し、対ソ協調を進めたローズヴェルト外交に極めて批判的であったこと、戦争終了後はすぐにドイツ分割論を唱えるなど、対ソ警戒論を主唱したこと、冷戦の開始に伴い、経済的な手段を中心とする封じ込め政策を唱え、とくにマーシャル援助と日本再建では重要な役割を担ったこと、ただし外交懸案をめぐっては対ソ交渉を通じて妥協する用意があったこと、1940年代後半までには北大西洋条約の締結、水爆製造に反対するなど、封じ込めの軍事化を批判する立場に転換したことを明らかにした。

ケナンに代わり、封じ込めの軍事化を牽引したのがニッツェであった。ニッツェは NSC68 (1950年4月)、ゲイサー委員会報告書 (1957年11月)、チームB (1976年11月) の作成に関与し、一貫して封じ込めの軍事化、アメリカの通常・核戦力の強化を求めたこと、キッシンジャーが進めたデタント外交、SALT交渉には不信感を持ち、対ソ交渉には懐疑的であったこと、朝鮮戦争後の封じ込め政策はニッツェ路線に大きな影響を受けたものであったことを指摘した。

ケナンのように相互譲歩を射程に置いた対ソ交渉論はヨーロッパ的な外交とは親和性を有するものの、ヨーロッパの外交理念に距離を置き、強烈な反共主義を奉ずるアメリカでは不人気であった。ウィルソンのようなイデオロギーの影響である。ケナンが高く評価したキッシンジャーによるデタント外交が結局、国内で激しい反発にあい、否定されたことは示唆的である。これに対して、ソ連に対する「力の立場」の構築を唱え、対ソ交渉に慎重であったニッツェ的な方針がアメリカ

では支配的であった。

大変興味深いのは、冷戦の終結に向かう過程で決定的な役割を果たしたレーガン大統領の対ソ政策である。レーガンは当初、ニツェ的な方針をとり、激しい対ソ非難を展開するとともに、軍拡路線を実施した。対ソ対話は途絶え、1983年末までに米ソ関係は朝鮮戦争、キューバ危機の時と並んで、最も緊迫した時期に入った。しかしレーガンはまもなくケナン的な柔軟な立場に転じた。そこには多くの要因があるが、Gaddisの研究（後述）によれば、ケナンの影響があった。レーガン政権の国家安全保障会議でソ連問題を担当するマトロックが、1984年1月にレーガンが行った重要な演説—それまでの衝突的な修辭、対ソ非難の言辭を避け、ソ連に対して話しあいによる対立の解決を求めた極めて和解的な内容—の起草にあたり、ケナンの助言を求めていたからである。レーガンはこの演説を契機に、対ソ政策の軌道修正を始め、まもなく米ソ関係は修復過程に入り、翌85年のゴルバチョフの登場によって、両国の関係は根本的に転換する。

レーガンは国内の反共保守派の反対を押し切り、ゴルバチョフとの間で話し合いによって米ソ関係の改善、冷戦の緩和、そして終結の道筋をつけた。レーガンがあくまでもソ連を信頼せず、ゴルバチョフの登場後も突き放した態度をとり続けていれば、米ソ関係は全く異なる展開を遂げたであろう。共和党内で最も強硬な反ソ・反共主義者として政治的信認を得てきたことで、レーガンは積極的に対ソ交渉に乗り出し、画期的な成果をあげることができた。

軍事的封じ込めがソ連に過大な軍事支出と対外支出を強い、ソ連経済の疲弊を助長したことは確かであろう。ゴルバチョフが社会主義体制の見直し、改革に乗り出した背景にはこの膨大なコストがあった。したがってニツェ的な封じ込めの圧力がゴルバチョフ改革の対外環境を形成したといえる。ただしそのような政策がソ連の後退、そして冷戦の終結、アメリカの勝利をもたらしたという見解は短絡的である。ソ連は膨大な軍備を維持し続け、レーガン軍拡には軍事予算増で対抗したからである。

冷戦の終結に至る過程では、軍事的封じ込めに加え、東西デタントによる人的・経済的な交流の拡大、西側諸国の思想・文化の東側諸国への流入が重要である。デタント期の対外世界との経済的・人的交流の増大を通じて、ソ連の多くの市民が西側の情報に接し、やがてソ連体制の正統性に対する信頼を失っていったからである。とくにヘルシンキ宣言（1975年）以降の東西ヨーロッパ交流の急速な進展の累積的影響には大きなものがあり、ソ連の知識人の「西欧化」に寄与した。ゴル

バチョフは西ヨーロッパの社会民主主義者の知的影響を受け、最終的にヨーロッパ分割の解消と冷戦の平和的終結を決断した。ソ連は依然、東欧革命を軍事力で押さえ込むことができたにもかかわらず、ゴルバチョフはそのような手段を選択しなかった。その意味で、冷戦の平和的終結はデタントの最大の果実であった。

つまりケナンが支持した1970年代のデタントは長期的には確かな成果をあげたのである。名うての反共論者であったレーガンだったからこそ、国内の反対論を抑え、対ソ交渉を進めることができた。軍事的圧力を軸とするニツェ的な路線と対ソ交渉を軸とするケナン的な路線が巧みに活用し、冷戦に事実上の終結をもたらしたのが、レーガン大統領であった。

②本研究の成果はさらに、「核」とアメリカの平和」論文にも反映された。この論文では、とくに冷戦期の核抑止論を文字通り象徴する戦略家であったニツェが、冷戦終結後に核廃絶論者に転じたこと、その背景には核拡散への恐れがあったことを指摘した。ケナンは冷戦期より核抑止論を批判し、水爆開発への反対、核軍縮を提案したが、その主張は冷戦終結後、ようやく実を結びつつある。キンジンジャー元国務長官、シュルツ元国務長官、ペリー元国防長官、ナン元上院議員による「核兵器なき世界」提案、オバマ大統領のブラハ演説（2009年4月）はその結実であった。冷戦期の米ソ関係に一定の安定化と予測可能性をもたらし、「アメリカの平和」を支えた核兵器は、冷戦が終わるや、その拡散によってアメリカの安全を脅かす存在と化した。冷戦の負の遺産であり、歴史の皮肉である。

③本研究の成果はまた、「アメリカの外交的伝統・理念と日米同盟の形成」論文に活かした。本論文では、歴史的・伝統的にヨーロッパ外交に距離を置く孤立主義外交を実践してきたアメリカが、どのような論理で本来はヨーロッパ外交の属性である同盟や勢力均衡の理念を受容し、アメリカ的外交に組み込んでいったのかを考察した。

ヨーロッパ的な勢力均衡外交論を奉ずるケナンは封じ込め政策の一環として、対日占領政策の転換を打ち出し、日本をアメリカ主導の冷戦戦略に組み込んだ。ケナンは経済・金融的な手段のみならず、彼が策定に寄与したNSC13/2（1948年10月）では文化交流による対日関係の強化をめざした。アメリカは1951年の安保条約、60年の新安保条約を経て、60年代前半までに日本を「同盟国」と見なすようになった。つまり軍事的次元だけでなく、経済・金融・文化的な側面を含む総合的、総体的な協力関係の形成がアメリカ的同盟の特徴であった。またこの頃までに、アメリカでは日本や西ヨーロッパ諸国との関係

を同盟と形容することに対する忌避が希薄化したことは、アメリカ外交が重要な点でヨーロッパ化したといえよう。

かつてケナンは対日同盟を NATO とは違い、文化、伝統、エスニック的なつながりを共有することのない「多かれ少なかれ、状況の産物」であると指摘した。これはおそらく的確な評価であったが、その後の日米同盟の発展は、アメリカ的同盟の特徴だけでなく、多文化主義・多民族社会に向かうアメリカの変容を映し出しているように思われる。

④最後に、『ハンドブック アメリカ外交史—建国から冷戦後まで—』はアメリカ外交の主要な出来事や事件について約 100 項目を設け、5 名の専門家が各項目について説明する研究書であるが、本研究代表者は、とくに「大同盟外交 (1941~45 年)—「奇妙な同盟」の内実」、「中距離核戦力全廃条約 (1987 年)—核軍縮交渉から米ソ緊張緩和へ」、「冷戦の終結外交 (1989~90 年)—封じ込めの総決算」で、冷戦の起源とその終結について、ケナンやニツェに関係する議論を展開した。

(2) 今後の展望

昨年 11 月に John Lewis Gaddis, *George F. Kennan: An American Life* (2011) が刊行された。本書は今年のピューリッツァー賞 (伝記部門) の受賞作品であることが示すように、おそらくケナン伝の決定版であろう。しかも冷戦史の権威である Gaddis らしく、ニツェに関する議論も多く、何よりもケナンの主張、議論をアメリカ外交史の展開に関係づけながら考察している。Gaddis がケナンの日記を含む個人文書を自由に使った成果を遺憾なく示しており、本書を越えるケナン論を展開することは、率直に言ってなかなか困難である。

しかし本研究の最大の独自性はケナンとニツェの比較にあり、すでに上記で詳論したような成果を生んでいる。ただケナンとニツェの膨大な個人文書、今年 3 月に議会図書館で収集したハリマン、ポーレン、ヘンダーソン—いずれもケナン、ニツェとの関係が深い外交官である—らの個人文書の分析はまだ終わっていない。また立教大学図書館に収められている大統領文書の分析もまだ不十分である。今後の展望としては、これらの分析を急ぎ、ケナンとニツェ外交構想についてさらに知見を深め、二人の外交論をアメリカ外交と関係づけながら、比較・検討する研究を刊行物として発表することである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 佐々木卓也、「アメリカの外交的伝統・理

念と日米同盟の形成」『アメリカ外交にわたる同盟』(研究主査久保文明) 日本国際問題研究所、2012 年、15-28 頁。査読無。

- ② 佐々木卓也、「20 世紀アメリカの中国政策の展開とパワー・トランジション—歴史的視野にたつて」『日米中関係の中長期的展望』(平成 23 年度外務省国際問題調査研究・提言事業成果報告書、主査山本吉宣) 日本国際問題研究所、2012 年、65-79 頁。査読無。
- ③ 佐々木卓也、「「核」とアメリカの平和」『国際政治』第 163 号、2011 年、1-13 頁。査読無。
- ④ 佐々木卓也、「アメリカの世界戦略と日本」『いわゆる「密約問題」に関する有識者委員会報告書』外務省、2010 年、9-18 頁。査読無。

[学会発表] (計 2 件)

- ① 佐々木卓也、書評会『冷戦—アメリカの民主主義的生活様式を守る戦い』アメリカ学会第 44 回年次研究大会、アメリカ国際関係史研究分科会、名古屋大学、2012 年 6 月 3 日。
- ② 佐々木卓也、報告「アメリカ「衰退論」と外交論争」『シンポジウム—「米国衰退論」再考』、アメリカ学会第 44 回年次研究大会、名古屋大学、2012 年 6 月 2 日。

[図書] (計 4 件)

- ① 佐々木卓也共同監修『もう一つの日米交流史—日米協会資料で読む 20 世紀』中央公論新社、2012 年、557 頁。
- ② 佐々木卓也単著『冷戦—アメリカの民主主義的生活様式を守る戦い』有斐閣、2011 年、228 頁。
- ③ 佐々木卓也編著『ハンドブック アメリカ外交史—建国から冷戦後まで』ミネルヴァ書房、2011 年、315 頁。
- ④ 佐々木卓也編著『戦後アメリカ外交史』新版、有斐閣、2009 年、351 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 卓也 (SASAKI TAKUYA)
立教大学・法学部・教授
研究者番号：60202090

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし